

英 学 の 反 省

中 村 順 一

一 英語學習態度の回顧

日本人の英語国及び英語に対する態度を歴史的に回顧してみるに、日本人と英人との最初の接触は徳川家康とウィリアム・アダムズとの間に於てなされた。勿論アダムズは英国を代表して来朝した使節ではないのであるが、家康がアダムズを引見し、引留めて外交顧問として厚遇したのは、海外進出に非常な熱意を示した家康の方針の一具現であつて、勿論英国を崇拜した等と云う類ではない。まだ西欧の事は殆ど全く知られていない時代の事である。西欧との交通がはじまつて以来約六十年の当時の一般対外態度である貿易の促進、海外進出の氣運と軌を一にするものである。勿論当時の日本の国力とエリザベス朝の英国の国力とは較ぶべくもなかつたのであるが、かかる事は十分には知られていなかつたに相違ない。とにかく、自から持する事を知つた英邁な家康は和親、通商を求めたゼームズ一世の親書に対しても、対等に鄭重な応答を行つた。

家康の死後には、幕府の対外方針は急速に鎖国へと向ひ、寛永十六年（一六三九）には英人と日本人との混血児すら海外に放逐されるに到つた。同時にポルトガルにも通航を禁じる等、幕府の対外態度は全く排外的なものであつた。これは当時の我国の實力が諸外国に比し、卓越していたからというわけではなく、他国とは主として距離の關係から、軍事的な來襲を受ける危険が少なかつたからであると考えられる。

この時期以後約百五十年間は鎖国の状態が続く。対外關係は平穩であつた。だが、それ以後は目まぐるしい程の変

化が相繼ぐ。寛政三年（一七九一）の林子平の「開国兵談」の語るロシアの南下の徴候に続いて、文化五年（一八〇八）にはフェイトン号の事件が起つた。英学の創始はこれを機縁とするものであるが、これは全く国防の見地からであつた。この事は当時の英語学習者達の著した「諸厄利亜語林大成」の序にある、この書をなすは「風波以外の警に備ふる」ためにするの語にはつきり見られる所である。この時代に於て英語国に対し、かかる消極的な態度をとつた事の可否は今問わぬとして、これが当時の幕府の方針、即ち国策——約十年ばかり遅れて外国船打払令が発せられた——の要請した所であつた。英学者の同じ様な態度は澁川六藏著訳の「英文鑑」の序にも見られる。モリソン号事件、それにつぐ外国船打払令の撤回等があつて英語学習熱は増すのであるが、この態度は安政開国まで続く。

開国はそれまでの英、米国に対する態度に百八十度の廻転を來らせた。これまでは洋学の代名詞であつた蘭学が、その位置を外国船として打払われていた英、米に譲つたのであつた。それで英語の習得も、英語国船撃攘のためでなく、もつと広義の国防の強化、英米に代表せられる西欧文明の移入、及び英米人との折衝の具の獲得のためとなつた。而してこの際英語国人によつて移入紹介せられた「文明開化」の諸事物は人の目を奪い、驚異は崇拜となつて、所謂欧米心酔時代を現出した。思想の方面から考察するに、成程フランス語及びドイツ語を通して移入せられたものもあつた。殊にドイツの理想主義は有能な思索人によつて情熱的に受入れられ、相当の程度まで同化されたが、その範圍は狭く、時期も明治の中期以後にかかり、むしろ欧米心酔より反省自覺の時代に影響を与えたもので、明治前半期の欧化は圧倒的に英米化であつた。即ち思想の系統は功利、実証の諸主義で、特に当時の政治の指導精神となり、教育は英学本位で、制度としては米国のそれにならつたものであつた。従つて教科目中英語は非常に重視された。これは当時の英米文化移入の要請に当然伴つたものであるが、同時に外交、經濟に於て特に英国と緊密な關係が保たれ——明治三十五年（一九〇二）には日英同盟が締結された——親英、乃至崇英の風潮は英語の知識そのものを特別に価値あるものとする様にもした。この同じ傾向は又、昭和時代に入り、英語国と我国との外交政策が衝突す

ると、英語の知識の獲得そのものをも蔑視する風に向つたものである。勿論排英語の論挺には国民教育の反省もあつたのである。明治の中期以來英語の研究態度は益々學問的となつて來たが、一方教科目中に於ては漸次縮少の聲が高くなつて來た。

二 英米心酔と英語學習

英語排斥の種々の論点を反省してみても、最も重大に思われるのは、明治初年の教育に英學が主となつたために、英米心酔、崇拜の傾向を生じ、これが日本の固有の美風、美德を破つて國民思想を淺薄な西洋思想の虜とならしめたとする点である。明治初年の歐米崇拜が行過ぎた事は明瞭である。これは既にその當時に於ても識者の心を苦しめた事であつた。即ち「米國教育の流弊」に悩み、「忠君愛國」「仁義道德」を顧みぬ傾向と称された。これは文字通りにそうであつたか。又これは英學採用の結果、もつと嚴密には、英語が未曾有の熱をもつて學習された結果であつたのであろうか。英語の習得がされたのは、西洋の文明を移入し国力を伸長させるためであつた。それなのにミイラがミイラになつたのであろうか。この歐化の時代を顧みて、多くの者が不満を感じるのであるが、併し、あの時の傾向を現代の眼、現代の我々の持つ抱負のみをもつてみて、判断を下すのは正しくない。例えば、當時の我國の國際的地位を語つて山村壽太郎は次の如く言つたのである。

「過去の本邦外交事情を顧ると、実に今昔の感に堪へない。即ち明治初年に於ける我國の外交問題は、先づ第一に我國の獨立を維持して行けるかどうかといふことであつた。それが明治二十年頃まで我國外交觀念の殆んど全部をなしてゐた。」

かかる時代の外交態度を非難して屈從的であると言つても、それは當らぬ言葉であらう。

又、長く日本を害したと言われる功利主義の思想についても、井上哲次郎の語によれば

「功利主義的の主張は當時に於ては、大いに意義のあつたことである。つまり長い間精神主義、理想主義によつて教養せられた日本國民に、余程甚しき弊害のあつたのに対してこれを救済することの切なるものがあるがために、大いに利用厚生を講じ、そして自由獨立の精神を鼓吹して起つて來たのである。」

この時代の歐化を評して徳富猪一郎氏は左の如く言つた。

「明治の初期より其の中期までは、日本人が日本人たることを恥とし、日本國が日本國たるを辱とし、日本人をして、せめて其の外形なりとも西洋人らしく、日本をして、せめて其の外形なりとも、西洋諸國らしからしめんと、上下を挙げて、無我夢中になりたる時代であつた。これは決して売國の徒の行業ではなかつた。何れも忠君愛國の志士が、これにあらざれば、日本國の存在を、世界に保持し難しと信じたるが為めであつた。」

勿論これは誇張された言葉であるが、兎も角明治前期の歐化の風潮は單に英學本位だから生じたと云う事は出来ないのである。當時の日本の文化と英米の文化との差の故である。水は高い位置から低い位置に流れるのが常である。當時の英米の文化の精神的な方面が、在來の日本の精神的文化と比較して本質的にはどちらがすぐれて居たかどうかは今ここで論ずる必要はない。當時の人人の眼に写つた、彼等が必要と思われた文化の方面は彼等にかく感じさせたのである。その頃の英米人には、教師、宣教師、技術者、貿易商人等、邦人の指導者たる位置に立つ人が多かつた。彼等がすぐれて居り、尊敬をされれば、その彼等の母國に敬意が払われたのも当然であつた。舶來の品が實際によかつた場合にはそれを產出した國が崇められたのは自然であつた。

とは言え、心酔、追隨の姿はそれ自身に於て眺められる時には、決して我我を満足させるものではない。勿論誰人も明治以來の日本の發展が外國文化の移入、消化に由來する事甚大であることを認めるが、この歐米文明崇拜の時代の批判には二つの態度があり得る。一つは、その結果を認めても、その過程を余りにも國民的襟持を欠くものとして嫌惡する事である。この態度をとる時、その嫌惡の對象の一つとして英語があげられる。併し、この場合にも心酔、盲

従の状態が英語習得熱の直接の結果であつたと云えない事は既に明らかにしたと思う。すべて開化の程度の相違に由来したのである。これは支那事変以後一時盛んとなつた支那語学習の熱及び態度を考へてみてもわかる事である。當時支那語を学んだ人達の中に支那に心酔的な態度をとつた人はいなかつた。彼等は何故の支那語研究であるかをはつきり認識して居た。支那語の知識は大きな目的達成のための一つの手段であるに過ぎなかつた。これを過去の唐化の時代、儒教思想傾倒の時代と比較してみればいい。この相違を生じさせたものは語学の習得と云う一つの精神的努力ではなく、むしろその対象となる言葉が具となつて表現している文化、その言葉を仲介として接觸し得る文化であつた。換言すれば、一国語の習得者とその国語の代表する文化との關係が、この態度を決定したのであつた。この点に深い反省が加えられなければならない。そこに語学者の覚悟、意志が重大な意味を持つ様になる。自分は先に、文化は水の流れの如く、上より下へと流れると言つた。併し、これはしかく機械的、一般的ではない。表面では水が流れ下つて行くかに見える場合にも、川口では底流がぐんぐん登つて居る時があるのである。又鯉は滝を躍り上つて登つて行くと言われもする。

明治初年には確に甚だしい英語学習熱が起り、欧米心酔の風潮が生じた。今それに類した外国語習得の熱が起ると仮定して、その際、又その国の文化に同様の心酔の状態をひき起すであろうか。維新の当時の我國の文化と西洋文化との距離——日本は二百年を越える殆ど全面的な鎖国の後であつた——は全く特殊なものであつた事を考へねばならない。而もこの時期を、日本は世界の歴史に於て他に見られないと言われる程積極的に、進歩的に越えて来た。日本精神の特色の一つを、豊かな包容力にありとする事も、誠に故ある事と思われる。一時行過ぎても一層大きく強くなつて歸つて来たのであつた。あの時代の行過を避け得ざる一つの過程と見るのが、もう一つの見方である。

一外国語の習得は、それ自身その国への心酔的態度を生出すものではない。事實は、その言葉の習得を通しての、その民族、文化の正しい理解が、その国家に対する盲目的崇拜や排斥を防ぐものである。我國に於ける幕末、明治初

年の攘夷、西洋心酔は、共に西欧諸国の認識の不足と表裏をなして居る。

併しながら物事は一足飛には成らない。初歩の外国語学習者に、その外国文化の認識、批判を求めるのは無理である。言語の学習は特に初歩に於ては殆ど全く技術的なものである。而してその獲得は容易ではない。生命ある言葉の眞の理解は、その中に飛込まなければ出来ない。端的に言えば、英語の学習に於て英語狂と云われる程努めなければ本当には掴めない。殊に英語の様に慣用的表現の多い言葉には、これが一層甚だしい。これは或人達には非常に不満に感じられるであろう。外国語の奴隸だと思われるかも知れない。その習得に努めて居る少年達はバタ臭く感じられるかも知れない。だが基礎的な技術の獲得なくして大成はあり得ない。そうしてここにも過程への同情的認識が望ましい。勿論この様な場合には、その指導教師の思想的態度が重要な意味をもつて来よう。これは後に考えたい。ただ、世の人にこの様な過程の温情に満ちた認識、激励が願わしい。子供のする事はすべて幼稚に見えよう。而も大成するのは彼等である。彼等に認めるべきは、その真摯な態度でなければならぬ。

今日日本人が従来 of 西洋諸国への追隨的な態度を捨てて、独立しようとして居るのは全く当然である。来るべきものが来たので、誠に喜ばしい事である。我等の發展はこれからである。唯憂うる事は、これが西欧諸国への嫌惡を伴つて反動的に行過ぎ、これらの国のすぐれて居る点にも眼をふさぐとしていわないかと云う事である。無理は必ずこたえる。第一次世界大戦の後、世界各地で感じられた深い幻滅も、今想起するに価するであろう。

英語の習得が、英米心酔と関係ありとされて、英語教師が反省を求められるのは、かえつて望ましい事である。我の任がかく問われるのは、又我我に期待されて居る所が大である事を示して居るに他ならない。

三 英語教授の教育的価値

英語反対の第二の論点は、第一の如く英語の研究自体の与える影響に關してではなく、現実の学校教育の課程中で

英語が不当の重視を受けて来たと言ふ事にある。この論者の立場は現代にあるのであつて、彼等は過去に於て英語の果した役割は認めるが、現代にあつてはもはや

「国語の書物が随分著わされて居る。これで十分である。外国語で書かれた書物を読む事が是非必要ならば翻譯すればいい。外国語の知識は一般読者には不要で、又普通社会生活にも必要はない。しかるに現代の教育では多くの人が外国語の奴隸となつて居る。而も能率はあがつていない。この外国語の時間を削減して学習者の苦痛を減じ、これを他の有効な課目に利用せよ。又外国語の知識は勿論必要であるが、それは一部に限られる。故にこれに対する適当な策を立てて、すべての学生が犠牲となる事のない様にせよ。」

と云うにある。この論に於ては多くの場合、英語と外国語とが同時に考えられて居るが、一般外国語の教授と、英語の教授との関係も考慮におきながら、考察してみよう。

多くの勝れた国語の書物の存在にも関わらず、これだけでは不十分な事は今更言うまでもない。所謂一般読者が翻譯の書物を多量に要求して居る。而らば、翻譯によれば、又これを今以上に盛にすれば、一般には外国語の習得は不要であらうか。現在我国で特に強調されて居る科学の世界の専門家の与える答は「否」である。即ち、この世界の進展は正しく日進月歩である。多方面にわたつて次次に発表される研究の報告を取捨し——勿論この全部の翻譯等は夢にも考えられない——訳し、印刷して出来上つたものに接して、初めて新しい事実に触れる者は常に先人の後塵を拝する者である。これは我々の目指す所ではない。科学の書物の翻譯紹介は勿論必要である。併しこれは当然網羅的、専門的よりも基礎的、一般的な書物への方向をとられるべきであらう。網羅的等は望むべくもない。また実際に訳書による場合に、その理解が、多少を問わず読者の原語の知識に助けられる事実も多くの人の経験した事であつて、現在の日本語が種種な意味に於て外国語の影響を受けて居る点からして、日本語を正確に理解する見地から一般の外国語教育の意義も考えられる。勿論日本語のかかる現状に対しては別の側から、批判がなされ得る。例えば国語の純

粹主義の運動の如きも考慮に入れられるべきである。今はこれにつき細論すべき場合ではないが、日本語の發達の跡を辿る時に、外国語がその洗鍊發達に力あつた事は否まれない事実であり、又「他國語を知らざる者は自國語を知らず」の一般的立言も、真理として多くの人に體驗されて來た事である。

これに対しては言われるであらう。そうだ、我我も専門家の必要は十分に認めて居る。ただ、これを一般に強要するのが不可だと言うのであると。ここに於ては、我民族が抱いて來た大きな抱負、世界に対する使命觀を、今一度見出す必要があるであらう。「八紘為宇」等と言われたのであるが、これは唯口にするのみで成就される事ではない。國民全体に世界を觀る事我家を觀る如き広い人生觀、包容力があつて、即ち現實的には雄大な海外進展の氣運があつて初めて可能である。ここにも英語教育の意味が認められねばならない。

英語教育——これは中学校及び高等学校に於ける英語の教授に限る。それ以上の専門的な研究は今含めない——によつて國民精神を振起すると言つても、唯これのみならば、國語で十分に出来るであらう。外國語の教授を通しての教育が、その言葉の理解、驅使の能力の獲得以外に有する意味は、外國人の考え方 directly に接觸する所にあると思う。これと、間接に外國的なものを理解する事との相違は、例えば、遠洋航海の報告を読むのと、實際に海に乘出す事との相違に較べる事が出来ると思う。この差は無形的なものであるが、體驗の中に深く刻まれた力は全人的な力となつて事に現れるものである。この體驗は出来るだけ多數の人に持たせる事が望ましい。

併し自分は今ここで従来の英語教授が、この点に於て十二分に期待を滿たしたと云う者ではない。種種の点に於て不十分、否、時には有害な場合もあつた。それらの点はあからさまに認めて反省したいと思う。この欠陥の故に、現在ではかえつて眞の姿が誤られている様に感じられる。今英語教育のなし得る、又相当程度まで成就し來つたと自分の信ずる点をあげたのであるが、併しこれは、英語教育がかなりな程度まで成功した場合の結果であつて、あらゆる場合にこれが遂げられたわけではない。一國語の習得には運命的に労苦が伴つて居る。殊に我々が西歐語を習得する

場合の如く、語系を全く異にする場合には、それが一層甚だしい。勿論この労苦は全くの捨石となるものではなく、一般知能の訓練に価値が非常に大であると言われて居るのであるが、尙これは直ちにはつきりと眼前に提示する事の困難なものである。又外国語の習得には積極的に行われる場合には深い興味が伴うものであるが、一般には、殊に学校教育に於ては、重荷と感じられる場合が多い。機械的な暗記は馬鹿らしく思われる。而して習得した知識も主として将来への準備のためであつて、直接には他の学科、例えば、国語、家政的学科の様に直に役に立つ事は少ない。即ちその性質上、四年乃至五年の習得を経て後漸くその効果を示すものである。これのもたらず利益は莫大なものであるが、遂にその用法を十分に会得せず終つた者もその数少しとしない。故にこんな大きな犠牲を払う事はやめてもつと他の役に立つ科目に時間をむけよとの説がなされる。

この能率の方面からの英語教授への非難は「英語に六年間随分時間をかけながら、それでいて手紙一本書けない。新聞一つ読めないではないか。」と云う言葉に端的に表現される。これに続けて、外国に旅行をした人は、旅行者に二、三箇月位の速成で実用の言葉を教え、相当の能率をあげて居る、ベルリッツ・スクールの事等をあげて、我國の英語教授が殆ど不必要だと言わぬばかりの口吻を洩す。又相当の年輩の人で以前に英語を学んだ人達からは、今の学生の語学の力が昔に比較して劣ると言われる。前者に関しては、我國の英語教授が直接に実用英語を目指してはいない事が言われなければならない。軍略上、支那語やマレー語の速成教授がされて居た時代があつた。どれだけの能率があがつたか、つまびらかにしないのであるが、同様の方法で英語も教えられる。そうして実用の方面ではかなり効果もあげる事も出来るのではないかと思う。併しこれは英語教育の目指している所ではない。我我に於ては単に技術としての実用的英語の教授よりも、もつと高いものが意図せられて居る。仮令低い段階の教授がされる場合にも、これは将来への準備であるとの意識、即ち、この知識は英語国文化の解釈の具となるべきものであるとの意識をもつてなされて居る。だが速成英語にはかかる意味の将来はない。

次にベルリッツ・スクールで学ぶ人達、又明治の初期乃至中期に英語を学習した人達と、現代の中学、高校生との間には質的、量的に相違のある事が記憶されなければならない。前者とは年令の相違の他に、その言葉の必要の認識が大いに違ひ、又その知識を応用する機会にも比較にならない程の差がある。後者の場合には、当時の人達が選ばれた極く少数の秀れた学生であつた事、今日では全く比較にならない程の多くの者が一律に教授されて居る事を考えなければならない。

併しこれらよりもつと重大な原因とみるべきは、英語教育が上級学校への入学試験の準備のために歪められた事であろう。即ちこのために事実上の英語教授の目標は入学試験問題に答える事におかれ、生徒の努力は与えられた英文に対してとにかくなんとか訳をつけると云う方向に向つた。その結果英文に接してもその中に含まれて居る内容の直接的把握と云つた事は忘れられ勝となつた。これは英語が直ちに新知識摂取の具と考えられた明治の先輩の学習時代の態度とは大いに違ふ点である。教授法もこのために、言葉の自然な解釈から離れて、難句、難語の説明に重点がおかれ、直統直解の精神が忘れられ、又実用にも立たなくなつた。入学試験に合格するには発音に注意する必要もありなかつた。のみならず、競争試験に打勝とうとするために、負担が増して来た。学習者はこのために多くの時間を費したけれども、それは英語そのもののへの興味のためとは云えぬ場合が多かつた。勿論これらの点は反省せられて来た。改良も加えられて来た。併し現在に於ても、尙この弊害から全く脱し得てはいない。これは恐らく、多少の相違はあれ英語以外の科目に就いても言われ得る事であらうけれども。

次に、英語が他の科目に比較して過重されたとする考と並んで、英語が外国語の代名詞の如くなり、英語以外の外国語が不当に顧みられなかつたとの非難がある。これは特に現代の様に、英米崇拜、依存から脱して全世界と自主的に指導的に交わろうとする時代に強い。即ち、これまでは外国語の中で英語を偏重した。今は他の重要な国語にも偏頗のない習得機関を設けよと言う。これは一見した所誠に当然な主張だと感じられる。而して現在の中学、高校教育

に於ては正しく外国語は即ち英語と考えられて居る。少くともそう考えられて居る様に見える。併しながら、これをもつて直ちに、明治初年の教育制度に採用せられた英學本位の伝統が今日に及んで、その結果不当に他の外国語が圧迫せられて居ると考えるならば、それは誤である。成程この伝統のつながりではある。これは疑うべくもない。併しそれが今日にまで到つて居るのは、かくあるべき客觀的情勢があつた故である。この理を見ないで、唯結果のみから推して英語が盲目的に偏つて習得されたとするのは当たらない。自分は思う、日本に於ける外国語の知識の需要と供給の關係は正常に保たれて來たと。江戸時代の蘭學が英學にとつて代られたのは當然の運命であつた。而してこの次に來るべきものが何であろうとも、その時機が到れば自然な推移が起るであらう事には疑問の余地はない。言葉が自然の道を歩む事は、あたかも水の低きにつく如きである。併し次に來るものは、それが仮に仏學、又は獨學、或は露學と呼ばれるものでありとしても、もはや従来の英學本位と言つた様な意味で本位となる事はあるまい。又そうあらせてはならない。本位は我々であり、自主的な攝取がなされなければならない。

英語と並んで重要な外国語として我々は獨語を問題とする。——仏語が世界に指導的な位置を有して居た時代は過去の一世紀と共に漸次去つて行つた。——果して獨語の學習はこの國に於て不当に輕視されたであらうか。成程第一次世界大戰の際にはドイツは敵國であつたために、敵國語の教授は廢止せよと言つた者も居た。併しこの小兒病的な主張は一般的には容れられなかつた。いつの時代にも具眼の士はあつたのである。現実の中学、高校の科目中の外國語としては、確に英語が獨占的位置を占めて、獨語は殆ど顧みられていない様である。併し、その故に獨語が輕視されて居ると結論すべきでなく、寧ろ、獨語の知識に対する日本の要求乃至需要に對して、それに相應するだけの獨語の知識が供給されて居るか、その機關は整つて居るか、の観点から論すべきであると思う。誰も我國の中学、高校でホツテントットの言葉が教えられていないからと言つて、この言葉が不当に輕視されて居るとは言わないであらう。而らばドイツ語の學習の機關はしかく不十分であらうか。大学では決してそうでない。求める者への道は十分に

開かれて居る。比較的重要な外国語、即ち、仏、支、露、西、馬等の習得の機関は整つて居るか。これは主として大學、特に外国語學専門の大學の問題である。そうして需給の關係は相当満足なものであると私は思つて居る。併し「英語のみでなく、他の重要な國語にも偏頗のない習得機関が必要である。」と主張する人達の意味する所はかかる機関が中學、高校に存すべしとするのである。

故に問題は、つきつめてみれば、日本に於ける外国語教育を、在來の様に二段に考へて、即ち中學、高校教育では英語を一般乃至基礎外国語として一律に課し、他の外国語はその基礎の上に立つ——事實英語の知識は現在の主要國語の大部分のものの學習に大いに役立つ——發展とする仕方と、數種の比較的重要な外国語を並列的に中學、高校で教へ様とするしかたと二様に分つ事が出来る。なお、後者には、異なる外国語を學校別に分けて課すべしとするものと、同一校に於て數種のものから選択させよとするものがある。勿論この後者の説は實施に當つては先ず教授者の數——これは唯漫然と「各校に於て數箇國語を教授すべし」とか「一府県に……の割をもつて數箇國語を各學校別に教へよ」等と云う人の想像に及ばない程多數の新教師を要する——その他技術的に困難はあるが、併しこれらは本質的な問題でなく、このために議論が左右される事は正しい事でないから、今この事は問題にしないで論をすすめる。

この二説を素朴的に比較する人には後者の秀れて居る事は全く明瞭だと感じられる事と思う。何故かなら前者では中學、高校教育終了者は、一律に英語しか知らないのに反して、後者に於ては、彼等は重要な外国語數種に通じて居るのである。多面的に世界に働きかけて行くのには當然この必要がある。併しながら、よく考へてみるとこれは抽象された想像に過ぎない事を知る。両者に於て等しく、中學、高校教育の外国語教授は、どこまでも將來の進展のための基礎——それが外国文化摂取の具とされる場合にも、或いはもつと実用的に使用される場合にも——を作る事を目標とするものである事が忘れられてはならない。（私は信じる。中學、高校教科目中に含まれる外国語は、所謂速成

外国語教授であるべきではない。)即ち共に第二段階が開かれて居るのである。故に前者に於ても、英語のみならず、他の外国語が学習される。即ち、それぞれ専門の国語が選ばれて、既得の英語の知識はすべてその基礎となる。後者に於てはそれぞれ専攻として選ばれた国語が継続研究される。ここに於て、この両者の比較は二つの面からなされる事となる。即ち、①共に第二段階に入つて行く人達にはどちらの方法がより能率的であるか、及び、②第一段階のみを経て社会に出る者——勿論この方の人数は比較にならない程大である——の持つ外国語の知識として、一律の英語と、種々の外国語とどちらが適切であるか。

専門に入る人には恐らく後者の方が有利であろう。恐らくと云うのは、かかる人には概ね唯一つの外国語の知識のみでは不十分で、その場合には大抵英語がその中に含まれるから、結局どこかで英語を学ばなければならないであろうから。又実際問題としては、この制度によつても、英語が今占めて居る位置からして、自然に第一段階に於て英語を選ぶ者が多く、彼等には結局他の制度と実質的には同じ事となる。而して彼等の数は少くとも半数以上にのぼるであろうと思われる。第一の段階のみで終る人の場合には、英語と他の外国語との文化的、その他の価値の比較によつて定まるものと思う。この点で英語が非常な強味を有するのは、その世界語としての性質である。通商貿易上に英語の占めて居る位置は云うまでもない。文化の領域に於ては、勿論、英語国以外の国の文化にすぐれて居るものがある。これらに接するには自然他の国語を学ぶ必要がある。併しあらゆる文化に最も容易に接し得るのは英語を通してであろう。又この場合の様に、その国の原語によつて、文化を解釈すると云う事は、第一の段階を経たのみに期待するのは無理であつて、第二の段階を経る事が必要となる。この段階に於ては、勿論前者の場合でも英語のみに止まつて居るわけではない。明治の歴史を回顧してみても、實際前者の方法によつた人達が諸外国の文化を消化して日本を成長させて来たのである。かく私は英語の世界語たる見地から、又これが学び易いヨーロッパ語である点からして、基礎として英語が選ばれ、これが第一段階の中心となるべきではないかと思う。「中心」と云うのは、私は制度

に於てかかる点に關しては弾力性をもたせ、状況に應じてその制度を生かしたいからである。實際中学、高校教育を受けた人達の中に英語のみでなく、他の文明語を理解する人がある事は、彼等の目を広く世界に開かせると云う意味で有意義であると思う。

四 英語教師の反省

私は思う。中等教育で、英語が過去に於て不当に重視されたと言われるのは單に時間数が多かつたと云うだけの理由に止まらない。英語に時間が多く与えられたのは海外の文化の理解が日本の進展のために必須であると考えられ、又そのために、英語は中等学校で相当まとまつた力を与える事が必要とせられた故であつた。これが我國の文化の水準の向上と共に訂正をさるべき状態に到つたのがこの理由の一つであるが、尚これとは別に英語の教師が余りに自分を高く買過ぎて居たと云う点も考えられはしないであらうか。彼等には、自分の専門の業とする所は、直接に外國の秀れた文化に接する具であるとの誇りが、その意識の有無にかかわらずあつたのであらう。この考えはたしかに明治初年以來長い間正しい事でもあつた。實際日本が近代的国家として誕生したのは、英國を通して、英國の思想及び技術によつてであつた。所謂英學によつたのであつた。併しこの英學も、英語の學習のみならず英國系の學術を含んだ初期の形態から漸次分解して學問、技術がそれぞれ獨立して来て、その後に残つたものの一つが職業的英語教師であつた。彼等の多くは、先行した英學者達のあつた様な英米文化の移入者たる位置から離れた。即ち大部分は中等の學校で英語の初歩を繰返して教える存在となつた。併し、彼等の誇りは尚なくなつた。恐らく先進の文明國の言葉を知る者たるの英語崇拜的な氣持が彼等の中にはあつたであらう。又かかる感じを起させる客觀的情勢もあつたのである。それに加えて、彼等を甘やかしたものは、上級學校の入学試験に於て英語の占めた高い位置であつた。實際、生徒には英語が出来なければ一人前の人間でない様にさえ感じられたものであつた。このために英語科の教師は

のさばつたと言われる。(意識に有無はあつたろうし、又勿論例外もあつた。今は一般的に論じて居るのである。)

英語が出来た人間は偉いと生徒にも考えるものが多かった。(自分の経験では、英語を専攻した学生の間であるが、彼等に人間の価値はその人の持つ英語の知識の量にはよらないものだと思はせるのに困難を感じた。)一般の文化はどんどん摂取、消化されて日本のものとなり、進歩して行つて居る時に、英語が教育の中で、こんな位置を續けて行くならば、それに反動が生じるのは当然の事である。

又一面、英語を習得した人達の中に、人の目をひく不愉快な態度が見られた。即ち軽薄なバタ臭さと呼ばれるものである。これは所謂「アメリカ帰り」の或る人達に見られ、かつてのモダン・ボーイにも感じられたものであつた。又英語を話す者が、外人との交際に於て卑屈な、歛心を買わんとする様な態度を示して心ある人士にあきたらなさを感じさせた事もあつた。私はこれらがすべて英語の学習の結果であるとは決して考えない。かかる事にはすべて、もつと広い根柢があるものである。言葉の習得よりも、例えば、アメリカをあらゆる点に於て進んだ国と浅く考えてその模倣がなされたり、又幾部分は映画にも影響されたであらう。併し、かかる事がアメリカに關する事に触れた人達によつてなされたと云う事実は残る。又西洋人との應對に於ても、多くの場合彼等が新知識の点で、又經濟力の点で優位にあつたため、日本人が自然に卑下した態度をとつたのであるかも知れない。併し尚不満足之感は残る。而して、過去に於ては多くの場合、英語教育がかかる事の防止の方向にあまり役には立たなかつた事は認められなければならぬと思う。これらはすべて英語教育がなされた為ではなく、十分になされなかつた為であるけれども。

英語教師自身「國家的觀念に乏しく、個人主義に傾き、輕佻なアメリカ風を喜ぶ」とさえ非難された事がある。勿論すべての英語教師がかくあつた筈もなく、又事実、一般に比較すれば、英語教師の中に於けるかかる傾向はずつと僅かであつたと思う。併し、かかる批評に対して十分に反省に反省を加えねばならぬ理由は、教師が持つ強い感化力の故である。殊に英語の教師の様に、外国の文化の教授、伝達をする者は、例えば数学の教師よりも思想的影響に於

でずつと大であると思う。彼には海外文化に対する態度を教える機会が常にあり、意識の有無を問わず、この意味の感化を絶えず与えつつあるからである。この点、彼の責任は大きい。ここに彼の思想、人格が特に反省されなければならない点がある。彼には自国の文化及び世界の文化に対する明瞭な批判的認識がなければならない。又理想を持して、自分の今従事して居る業が、その実現のどの部分を担うものであるかの自覚が必要である。我我は英語教授の教育的価値をはつきりと認めたものである。併しこれも、それが正しく遂行される事を前提としてであつた。過去に於て幾多の勝れた英語教育者を有した一面に、又不十分な点もあつた事は事実である。而して今我我に反省が迫られて居る。我我は必ず、過去以上に出なければならぬ。自分一個としては明治初年の英学者敬宇中村正直先生に学ぶ所が多い。先生は、当時英学を修めるものに物質的文明に傾く弊あることを察して精神文化の宣伝に努め、「西国立^{ヘルプ}志偏」^{キヤラクター}、「西洋品行論」等を訳述出版して社会に教えられた方である。

英語教師は国士たるの信念が必要であると言われて居る。これは広義にとられるべきであらうと思う。英語教師の第一の務はどこまでも英語の教授にあるのであるから。併し、彼はその教材の關係上、外国文化の正しい批判を常に予想されるものであるから、この様な言葉が特に言われるのである。又「從來外国語の研究があまりに無自覚になされたために、思想が無暗に輸入せられて、思想の混乱を来した」と言う人もある。かかる状態もやはり過渡的な現象であつた。又これは外国語教育者の直接の責任であるとも言えないと思う。併しここにも学ぶ所がなければならぬ。すべて、我我の心構の問題であり、又外的なものを受容に際しての我我自らの有する文化、教養の深度の問題である。外国のよいものを移し植えて、美しい花を咲かせ、豊かな果を結ばせるためには、細心な選択が必要であり、又それに劣らず、我我の土地そのものを耕して居る事が必要であらう。すべて、批判も、理解も、消化もそれを行う人の内に藏する教養、学識の程度に比例する。本居宣長の儒者を評して言つた言葉「己が国の事をだにえ知らぬ儒者の、いかでかひとの国の事をば知るべき……」は深い意味に於て真理である。

單なる英語の知識、その運用の能力は、言わば切れる刀の如きであり、又力ある藥の如きである。すべてその使用者にかかつて居る。同じ英語を自由に話す能力が時に世に輕蔑せられる通弁やガイドの口過の役にも立てられ、又全世界に対する活躍の武器ともなる。即ち、この力が生きて物をいうのは、その背後にあり、それを駆使する精神である。又この精神は單なる態度、或いは覺悟と言つたものだけでなく、それが包含する文化的内容の広さ、深さに比例して力を増すものである。だから他国を對手にした外交や宣伝に経験のある人から聞くのである。唯の雄弁だけでは結局對手を承服さす事が出来ない。矢張り力は、言葉が具となつて伝える内容である。必要な材料、豊富な知識である。これは我我自身で経験した事もある。外人と会話して居る人を見るのに、別に内容を持たず唯口だけを器用に動かして居る人は淺薄である。彼等には落着が見られない。寧ろ我が心を打たれるのは、内に深く藏する人が、ゆつくりと思う所を話して居る態度である。勿論後者がほんとのものであつて、前者は道具であるべき会話の能力の奴隸となつて居るのである。誠に苦しい事であり心すべき事である。ここでも外國語の知識は、單に他の科学等の知識と異なる所がある事が考えられる。

英語の教師に期待されて居るものは、この心構のみに止まらない。英語駆使の能力を生徒に与える事に於て、もつと能率的にする事が絶えず要求されて居る。英語教授が非難される場合には、大抵の場合、「あれ程時間をかけながら、得る所は少ない。実用にも立たない。」と言われて来た。英語國を視察して歸つて来た人で、日本で習つた英語は、あちらでは役に立たない、と云う風な報告をした人もある。この事に就いては色々な事が言われると思う。中等教育に於ける英語教授の実用的効果については、これまでに触れる所があつた。ともかく一國語の習得は非常な努力を伴うものである事が認められねばならない。唯單に能率の点から論ずるなら、漢文についても略同様な事が言えるであらう。現在の中学、高校の英語教育では基礎をつくる事を目標として居るので、読書力もその後の努力でだんだん出来て来、會話の能力もこの上に多少の練習を加える事によつて進んで来る様になるのである。

入学試験の与える掣肘に就いては既に述べる所があつた。これがなくなれば教授の方法はもつと自然に帰る事が出来るのではないかと思う。これまでただ試験のために無闇に詰込んだ反動として、生徒がこの大切な外国語の習得に對して、或は冷淡になるのではないかとひそかに恐れても居るのであるが、併し、過去の事や反動はどうでもいい。我々に最も重要な事は、英語教育の目的をここでもう一度はつきり思い返す事である。そうして新しい発足をする事である。正しい事への努力は、仮令一時は他の影に蔽われる事があつても、いつかは必ず果を結び、認識される事を確信する。

英語の教授法に於ても、考慮さるべき余地がある様に思う。例えば発音の正確を重視して、——これは勿論正しい事であるが——そのために英語をはじめたばかりの生徒に発音記号と共に非常に多くを要求して、英語は難しいと云う印象を与え、又實際難しくした如きその一つであらうと思う。個個の音の正確を一挙に期し過ぎた傾向はなかつたであらうか。これは長い間の訓練によつて次第に改良されて行くものだと思う。一つの記号の示す標準的な音を非常に厳密に教えようとする努力がされるが、實際にこの音が言葉の中で用いられる場合には、前後の音の關係や、文全体の抑揚等から種々影響を受けるのであつて、前述の標準音を正確に出しても、それで英語らしい英語とは必ずしもならないのである。勿論、この標準音を初めに厳格に教えておく事は、後のいゝ基礎となると思うが、そのために学習の負担を増し、特に興味を減殺する事と、差引の勘定はどうなるであらうか。個個の音を、あまり細かく教えるよりは、むしろ音のまとまりとしての語や文の強調や、抑揚をさとらせて、だんだん鍊つて行つてはどうであらうか。又学習者の発音に過敏にならないで、もつと彼等が聞いて意味の把握をする面を強調すべきではあるまいか。事實、正確な発音は話者の耳の訓練に伴つて可能となるので、初めに口形等を暗記させ、それを試みさせても、それはほんとに身についたものにはならない。それで結局、その時は負担で、後には割に実効を伴わない。それに厳密にと云う教師自身の発音が、細かく云うならば、不十分な場合が多い。英語を専門にして居る自分自身が幾十年もして居て

の、その結果を考慮に入れて入門者への要求も考えるべきであろう。自分は今発音重視の可否を論じて居るのではない。すべて能率の点からである。

高等専門学校乃至大学での英語教授の方法が従来非常に無反省であつた事は明瞭である。近來この点が認識されて、種々研究をされて居るのは誠に喜ばしい事である。併し自分の知る範圍では、まだまだ反応が不足の様に思う。来る時間も、来る時間も、唯訳解を重ねてその單調を破るのは唯漫談、と云つた風な授業が、あちらこちらに行われて居る。私は今日本の大学に於て英語教育に従事して居る人達の英語の読解力、又英語による発表能力が決して満足すべき程度のものであるとは考えない。又斯学の研究の業績として発表されるものも——勿論色色不便な状態に於てなされるものではあるが——單なる紹介でなく、学的に秀れたものは僅少である。これは眼前にはつきりと見る事の出来る事実である。殊に、この時代に於て、高等の教育に従事する者、就中、英語教育に従う者は猛省すべきではあるまいか。小成に安んぜず、使命をはつきりと認識して努力を重ねるべきではあるまいか。

大学の英語教授に於て特に考慮するべきは、他の外国語との關係である。自分は既に、我國の外国語教育に於ては、最初から數個の國語を並列的に教えるよりも、英語を中心とした教育を第一段階とし、第二段階に於て第一段階を基礎とし各國語に分化すべき事を主張した。これは又事實上現行の制度でもあるのであるが、自分は英語が基礎になる事を信じる者である。それは英語がその語系及び語彙の方面から、南歐及び北歐の諸語と共通点を多く有する故である。而して英語の教授に於ても、時にふれて、独、仏語等と共通な点を指摘する事は、単にこれらの諸國語の習得を助ける事、英語とこれらの諸語との關係を現実に理解せしめる等の利益の外に、言語自体の反省に導く等、無形の利も少しとしない。教授者がこれらの言葉の知識を有する事の必要等今更ここに説くまでもない。要する所は、わが中にあるものが外に現れるのである。

かく考へて来ると、一般人には英語は不要で少數の堪能な人に任せておけばいいと言つた風な考へが、事實の認識

に乏しい人の言である事を知る。我国で最もよく普及して居る英語に於てすら、人材に豊かであるとはしない。他の国語に於ても、勝れた学者は従来よりも一層切実に要求せられているのであつて、外国語の学習は益益真剣にされなければならぬ現状である。「少数の専門家」と云う事が言われるけれども、これは単に一定数の専門の人を特別に訓練を受けさせて作りあげると云う風にはいかないものである。この点は、今我国で切実に求められて居る科学教育にも見られるのであつて、少数の勝れた科学者の存在はそれを頂点とする三角形を埋める科学に従事する人達の存在を予想するものである。一般に熱があり、水準が高まつて、初めて高い頂点も生まれる。故に学問の世界に於ては直接に実用とは関係のない事に大きな意義が存する。ここに又、英文学、英語学の純粹に学的な研究の意味が存する。これは決して時代を忘れた有閑、物好の学究の慰物ではない。ここから高い水準が生じる。この点にも認識が必要であると思う。我々の目標は高いのであつて、単に眼前の変化に輕輕しく支配されないものである。

ここに實際の問題として中学、高校の教師が、自分の学力を増そうと真摯に努める場合の苦しみがある。彼等は自己の使命の大なるを思い、懸命の努力をしようとする。多忙の間に努めて居る人が實際多くある。その場合に彼等のとる道は何であるか。その最も多いのは英文法の研究であらうと思う。我国に輸入せられた高級の英文法書は夥しい数にのぼる。而して世界のいづれの国に比べても日本程多くの人が英語を文法的に研究して居る国はないらしいと言われて居る。確に英語の理解に文法の知識は必要である。併しここに考えらるべき問題はないであらうか。一般的には教養ある英米人も困る様な問題に頭を使わないで、もつと自由に意味内容を把握する方面に重点が置かれるべきではあるまいか。英語の表現の文法的な解明の熱意のために、内容の批判的把握の方面が幾分影を薄くして居るのではないか。文法の研究は少し入った人には直にわかる様に、現代英語の知識だけでは不十分である。近代初期の英語、中世、古代の英語にまで溯らなければ、多くの文法現象の理解は困難である。これには当然ドイツ語の知識が必要となり、又仏語の他に古典語、特にラテン語にも通じなければ、高級な文法書に説明せられてある英文法の性質はほん

とには解らない。併し普通の人はここまで到る事は出来ないので、文法の研究により英語の力の発展を求めて居る人の多くは失望を感じる。行詰を感じる。併し、私は思う。彼等の道はそこではなくて、もつと實際的に内容を掘む方向へと行くべきなのではあるまいか。今はこの点を細論する場合でないから深入はしないが、反省に価する事だと思ふ。

以上多くを述べて来たが、私は真に英語に打込んで、英語教育に尽そうとする者にとつては前途は洋洋として居ると感ぜざるを得ない。

Nakamura, Junichi

Reflections on the Learning of English in Japan

Résumé

I Historical Survey of the Attitude in Learning English in Japan: When English was first studied after the incident of the *Phaeton* in 1808, it was for the purpose of repelling foreigners. But when business transactions with foreign countries began, the purpose of learning English was to strengthen national defense in a broader sense, to import Western civilization, as represented by England and America, and to attain the means with which to negotiate with the English-speaking peoples

The “westernization” in the first half of the Meiji period was overwhelmingly “English-Americanization.” The military alliance with England in 1902 led many people to feel that there was special value in the knowledge of English. But when Japanese foreign policies clashed with those of English-speaking countries in the 1930’s and on, there appeared a tendency to look down upon the effort to gain the knowledge of English.

II Blind Adoration of England and America and the Learning of English: The most serious point asserted in criticizing English education seems that the emphasis put on the teaching of English in the education of the early Meiji period led to the blind adoration of England and America. But, in reality, this kind of tendency happens when one culture faces another more advanced culture. Correct understand-

ing of a culture or a nation comes through the knowledge of the language of the nation.

III Educational Value of the Teaching of English: Those who are against the teaching of English say that English is unduly stressed in the curriculum, for the knowledge of foreign language is necessary only for comparatively few specialists and for the rest translations are enough. But it is not so.

Elementary English teaching has not been always successful, but it does not aim at quick training in conversation. Its objective is laying a foundation for the interpretation of the cultures of English-speaking countries. And it was when the demand for this was strong that the teaching of English was stressed; it was only a natural thing.

English makes a good foundation for the study of other European languages.

IV Reflection of English Teachers: Some defects that seem to be the result of English teaching in Japan are due to *inadequate* English teaching. The teachers of English influence students' view of life and world more than the teachers of natural science, for example.

Explanation why the English taught in high schools is said to be impractical. Consideration of the effect of entrance examination in connection with this point. Criticism of English teaching in colleges.